

# 沖縄語首里方言における音節構造の変化と 北琉球祖語の母音の音価推定<sup>1)</sup>

松 森 晶 子

## 1. はじめに

本稿は、北琉球（奄美・沖縄諸島）のいくつかの方言の記述データをもとにした歴史言語学的考察である。近年（とりわけ過去10年ほどの間に）、琉球語の祖語再建の試みが活発に行われるようになってきた。またそれに応じて日琉祖語、琉球祖語、あるいはその下位区分の祖体系における語の祖形案も徐々に提示され始めている（たとえばPellard 2013、2015、ペラルール 2016、五十嵐 2019、2021、ローレンス 2020、松森 2021など）。これらの先行研究で提示されている祖形案には、一部、互いに食い違い<sup>2)</sup>が見られるのだが、このような食い違いはこの分野の発展にとって、むしろ望ましいことと言えらるだろう。それを出発点にして意見交換を行い、祖体系についての考察を深めていくことができるからである。さらにそのような意見交換が契機となって、今後の琉球語の通時的研究が長足の進歩を遂げることも期待できるからである。

さて、松森（2021）でも強調したように、ある特定の語について祖形案を示す際には、その具体的な根拠とともにそれを提示する必要がある。すなわちその祖形を建てるにあたって、①どの地点のデータをもとにその祖形を推定したのか、②それぞれの地点の体系において（a）どのような音変化が、（b）どのような生起条件のもとで生じてその祖形が生まれたのか、③それぞれの体系において、どのような順番（相対年代）で②に述べた各種の音変化が生じて、祖形から現代の音形へと変化を遂げたのか、などを明確に示した上で、各語の祖形案を提示する必要がある。特に、体系内部の音や音節構造の変化がとりわけ激しい琉球諸語・諸方言の通時的考察に当たっては、各方言について現実に観察されているデータの具体例を可能な限り多く提示しながら、上述の①～③についての議論を展開することが不可欠である。

そこで本稿では、松森（2021）に引き続き、過去に成された北琉球諸語・諸方言の辞書の記述や調査報告を活用しながら、北琉球祖語に存在していたと思われるいくつかの語の祖形再建を試みる。具体的には本稿は、次のような辞書や調査の成果を用いた議論を行う。（本稿中に挙げられたデータは、特に断りがない限り、すべて以下の記述研究から抜粋したものである。）

（1）本稿で使用する北琉球諸語・諸方言の辞書の記述や調査の成果（出版年代順）

- a. 沖縄本島 首里方言： 国立国語研究所（編）（1963）
- b. 奄美大島 やまとはま 大和浜方言： 長田須磨・須山名保子・藤井美佐子（編）（1980）
- c. 沖縄永良部島 おきのえらぶ 知名方言： 平山輝男（編著）（1986）

- d. 与論島方言： 菊千代・高橋俊三 (2005)<sup>3)</sup>
- e. 徳之島<sup>あさ</sup> 浅間方言： 上野善道 (2017a,b)

本稿では、まず「北琉球祖語」に存在していたと思われる語の祖形を、内的再建と比較再建の方法を用いながら再建する。なお本稿を通じ、様々な辞書や記述研究から引用した現代の語例どうしを比較しやすくする、という目的のために、それぞれに使用されている異なる音韻表記を、国際音声記号 (IPA) にしたがつた簡略音声表記で統一した。

## 2. 琉球諸語をもとにした比較言語学的考察の必要性—母音の音価推定を例に—

琉球語の音韻体系に際立った特徴を作り上げた変化の代表として、「狭母音化」が挙げられる。この節ではまず、北琉球の狭母音化を経たと思われるいくつかの語に焦点を絞り、それらの祖形内部の母音の音価推定に関わる議論を行うこととする。この節で提示する祖形案の中のいくつかは、琉球語の音韻史に関する先行研究 —たとえば服部 (1979)、Thorpe (1983)、Pellard (2013、2015)、五十嵐 (2021) など— によってすでに提案されているものだが、この節ではその具体的な根拠を挙げながら、それらの祖形の妥当性について検討したい。

さて、「狭母音化」とは、半狭母音の \*e、\*o が、それぞれ狭母音の i (あるいは ī) 、u へと変わった、という変化である。これは、北琉球祖語から現代の琉球諸方言の体系に至るまでに生じた様々な音変化のなかでも、比較的あたらしい変化のひとつである。狭母音化は、南琉球 (宮古・八重山諸島) と北琉球 (奄美・沖縄諸島) では異なる経緯を経たのだが、本稿では特に、北琉球のそれに焦点を当てながら議論を進めていきたい。この北琉球の狭母音化を簡単に記述すると、(2) のようになる。

### (2) 北琉球の狭母音化

- a. 前舌母音 \*e は、\*e > ī > i というような経緯を経て、現代の i (あるいは ī) へと変化した。  
(例：\*?ame (雨) > ?am ī > ?ami)
- b. 後舌母音 \*o は、北琉球を通じて \*o > u に変化した。  
(例：\*?ato (跡) > ?at<sup>h</sup>o > ?at<sup>h</sup>u)

この節では、北琉球の諸方言の中でも国立国語研究所 (編) (1963) や長田・須山・藤井 (編) (1980) などによって比較的早く語彙と音韻の記述が進んだ、沖縄本島の首里方言と奄美大島の大和浜方言に焦点を当てながら、考察を進めていく。

現代の首里方言の体系では、北琉球祖語における \*e は \*e > ī > i という変化を遂げて、もともとの \*i と完全に合流してしまっている。したがって、たとえば次の (3) に挙げた首里方言の語群のなかの下線部の音節 ri または phi が、北琉球祖語の体系において、狭母音を持っていたか、半狭母音を持っていたか (すなわちそれらがもともと \*re や \*pe だったか、\*ri や \*pi だったか) を、この首里方言のデータだけから判断することは難しい。

(3) 沖縄本島首里方言の /i/ を含む語彙

turi (凧)      ?iri (錐)      ɸiru (ニンニク; 蒜)      ɸiru (昼)

そのため、比較再建の試みが必要となる。次の(4)は、(3)に挙げた語群の同源語を、奄美大島の大和浜方言の資料から抜き出して示したものである。

(4) 奄美大島大和浜方言における(3)の語群の同源語

t<sup>h</sup>uri (凧)      ?iri (錐)      ɸiru (ニンニク)      ɸiru (昼)

この大和浜方言では、(2)の変化の結果、\*e は(iではなく)中舌のiへと変化を遂げたため、(首里方言とは違って)本来の\*eと\*iは合流を遂げていない。

(4)に挙げられた例から、現代の奄美大島ではt<sup>h</sup>uri(凧)とɸiru(ニンニク)の下線部の音節の主母音は中舌のiで出現しているのに対し、?iri(錐)とɸiru(昼)のそれは前舌のiであることが分かる。これは(2)の変化が生じる前の祖体系において、両者があきらかに異なる母音であったことを示している。この事実は、北琉球祖語の段階において、前者は\*eで後者は\*iであった、と推定することによって説明できる。

したがって、(3)と(4)にそれぞれ挙げた4つの語の北琉球祖語における祖形は、次のようなものであった、と推定される。

(5) 北琉球祖語の祖形案(その1)

\*tore (凧)      \*?iri (錐)      \*peru (ニンニク)      \*piru (昼)

現代首里方言のmiという音節についても、同様なことが言える。次の(6)に挙げられた語例は、その下線部が北琉球祖語において\*meだったか、\*miだったかを、この首里方言のデータだけから判断することは難しい。現代の首里方言の\*meは、\*me > mī > miの変化を遂げて、ももとの\*miと完全に合流を遂げてしまっているからである。

(6) 沖縄本島首里方言のmiという音節を含む語彙

?ami (雨)      kumi (米)      ?imi (夢)      midzi (水)      mimidzi (蚯蚓)<sup>4)</sup>  
 nami (波)      numi (鑿)      mumu (粃)

ここでも、それが北琉球祖語の体系において\*meだったか、\*miだったかを判断する手がかりは、北琉球の他の方言のデータから得られる。(7)は奄美大島の大和浜方言のデータから、(6)に挙げた語群の同源語を抜粋して示したものである。

(7) 奄美大島大和浜方言の(6)の語群の同源語

?ami (雨)      k<sup>h</sup>umi (米)      ?imi (夢)      midzi (水)      mimidzi (蚯蚓)  
 nami (波)      numi (鑿)      mumu (粃)

(7) の語群から、現代の大和浜方言では、本来の \*me に由来する音節と、\*mi に由来する音節とが明確に区別されていることが分かる。この方言では本来の \*me は、\*me > mi の変化を遂げて、中舌母音 i を主音として持つ mi という音節で出現しているからである。したがって (7) の ?ami (雨)、k<sup>h</sup>umi (米)、?imi (夢)、mīdzi (水)、nīmīdzi (蚯蚓) の下線部は、北琉球祖語では \*me であったことが推定できる。これに対して、namī (波)、numī (鑿)、mumī (粃) の下線部の音節は、(大和浜方言において中舌母音 i で出現していないため) \*mi であったと推定できる。

以上のような推理の過程を経て、北琉球祖語には次のような祖形を再建することができる。(なお以下、祖形の間にある「~」は、「2つ以上の祖形の可能性があり、どちら(どれ)が妥当かの判断が、現時点ではできない」という意味を示す記号として使用する。)

(8) 北琉球祖語の祖形案 (その2)<sup>5)</sup>

*?ame (雨)	*kome (米)	*?ime (夢)	*me <sup>n</sup> zu (水)	*meme <sup>n</sup> zu (蚯蚓)
*nami (波)	*nomi ~ *numi (鑿)		*momi ~ *mumi (粃)	

以上のようにして、ある語の特定の音節が (2) の狭母音化が生じる前の体系において狭母音を持っていたか、半狭母音を持っていたかを、「比較再建」の手立てを採りながら判断していくことが可能となる。すなわち、首里方言というひとつの言語体系の事実からは判断が困難な過去の母音の音価を、同じ北琉球の異なる体系である大和浜方言における同源語との比較を行いながら推定していくのである。

ところが場合によっては、上述のような比較再建の手立てに拠らずに、ひとつの体系内部の証拠だけに基づいて、祖語の母音の音価推定を行うことも可能である。たとえば次の現代の首里方言の例は、下線部に tu あるいは su を持っている。

(9) 現代の首里方言の tu あるいは su を含む語彙

tui (鳥)    ?atu (跡)    sudi (袖)    suku (底)    susu (裾)    kusui (薬)

現代の首里方言では、北琉球の祖体系における \*o は \*o > u のような変化を経た結果、もともとの \*u と合流してしまっている。そのため (9) に挙げられたそれぞれの語の下線部が、祖語において \*to だったか、\*tu だったか、あるいは \*so だったか、\*su だったかは、この (9) のデータ<sup>だけ</sup>に基づいて判断できない。

ところがこの場合、その判断は (他の言語体系のデータと比較せずとも) 首里方言内部の言語事実に基づいて行うことが可能である。同じ首里方言の次のようなデータが、(9) の下線部の音節が、もともとは \*tu や \*su ではなく、\*to や \*so であったことを示しているからである。

(10) 現代の首里方言の tsi あるいは si を含む語彙

tsinu (角<sup>つ</sup>)    tsitei (月)    tsimi (爪)    ?u:si (白)    sinui (水雲<sup>もずく</sup>)

(10) の語群の下線部の音節は、すべて舌頂音 (coronal) の /ts/ あるいは /s/ から始まっている (すなわち当該の音節のオンセット (頭子音) の部分に舌頂音を持つ) が、これらの下線部の音節には、それぞれ \*tu または \*su が再建される。首里方言では、舌頂音の \*t、\*s をオンセットの位置に持つ音節の主母音にある \*u が \*tu > ti、\*su > si のように前舌の i へと変化を遂げた結果、現代ではそれぞれ tsi<sup>6)</sup> あるいは si として出現するからである。

以下本稿では、この「舌頂音の子音をオンセットに持つ音節の主母音 \*u が前舌の方向へと変化した」という過去に起こった変化のことを、「\*u の前進化」と呼ぶこととする。さて、この舌頂音から始まる音節内部の主母音の前進化の影響は、北琉球全体を通じて広く観察されるものである。松森 (1992: 7) はこの前進化は、少なくとも次のような二段階の変化として捉えられなければならないことを論じた。

(11) 舌頂音 (coronal) の子音 (\*t、\*s、\*<sup>n</sup>z) から始まる音節の主母音 \*u の前進化

- a. 舌頂音の子音をオンセットに持つ音節の主母音 \*u が、\*u > i のように中舌の母音 i に変化する。
- b. さらにその舌頂音の子音をオンセットに持つ音節の主母音 \*i の音が、\*i > i のように前舌化する。

奄美大島ではその変化の過程で、(11a) は生じたが、(11b) は生じていない。そのため現代の大和浜方言では、たとえば「角<sup>つ</sup>」や「臼」にはそれぞれ ts<sup>つ</sup>ino (角)、ʔus<sup>つ</sup>i (臼) のように、その主母音に中舌母音の i を持つ音節が出現している。これに対し沖縄本島首里方言では、本来の舌頂音の後ろにある \*u は、(11a) > (11b) の順に変化が及んで、最終的に前舌母音の i へと変化を遂げてしまった。その結果、現代の首里方言では (10) に挙げられた語群 一たとえば tsinu (角)、ʔu:si (臼) など一に典型的に見られるように、北琉球祖語の \*tu、\*su という音節は、それぞれ tsi、si として出現する<sup>7)</sup>。

以上のような事実を考慮し、(10) に挙げられた語群の北琉球祖語における祖形には、次のようなものを再建することができる。

(12) 北琉球祖語の祖形案 (その3)

\*tuno (角<sup>つ</sup>)    \*tuki (月)    \*tume (爪)    \*ʔusu (臼)    \*sunori (水雲)

さて、(11) に記述された変化 (\*tu > tsi、あるいは \*su > si) の影響を受けていない (9) の語群の下線部は、祖体系において \*tu や \*su ではなかったことが分かる。これらは、(11) の舌頂音の子音をオンセットに持つ音節の主母音 \*u の前進化が起こった時点では、\*to あるいは \*so であった。そしてその後、狭母音化 (2) の影響によって \*to > tu や \*so > su のような過程を経て現代の tu や su へと変化を遂げたと推定することによって、以上の事実が説明される。このような推定によって、(9) の語群の北琉球の祖形には、その内部に \*to あるいは \*so を持つ、次のようなものが建てられる。

(13) 北琉球祖語の祖形案 (その4)

\*tori (鳥)   \*ʔato (跡)   \*sode (袖)   \*soko (底)   \*soso (裾)   \*kusori (薬)

このように、ある一つの言語体系 (この場合は首里方言) のデータだけを用いて、ある語の特定の音節が祖体系において狭母音を持っていたか、半狭母音を持っていたか、についての判断がつく場合もある。

さて、上述の (12)、(13) に挙げられた祖形は、首里方言の体系内部を検討することによって (つまり首里方言の「内的再建」によって) 導き出されたものである。このような手立てで導き出された祖形は、比較言語学的方法によってその妥当性を検討・確認しておく必要がある。次の (14a) の例は (12) に挙げられた祖形の奄美大島の大和浜方言の語形を、(14b) の例は (13) に挙げられた祖形の同方言における語形を、それぞれ示している。

(14) 奄美大島大和浜方言における (12)、(13) の現代の語形

- a. tsĩno (角)   tsik'i (月)   tsĩmĩ (瓜)   ʔusĩ (臼)   sĩnori (水雲)  
b. t<sup>h</sup>uri (鳥)   ʔat<sup>h</sup>o (跡)   sudĩ (袖)   suk<sup>h</sup>u (底)   susu (裾)   k'usuri (薬)

まず (14a) の語群の下線部を見ると、(12) に示した再建形の \*tu、\*su に対応する音節には、大和浜方言ではそれぞれ tsĩ、sĩ が出現していることが分かる。これに対して (14b) の語群から、(13) に示した再建形の \*to、\*so に対応する音節には、大和浜方言ではそれぞれ t<sup>h</sup>u (あるいは t<sup>h</sup>o)、su が出現していることが見て取れる。このようにして (12)、(13) に挙げられた祖形の妥当性は、比較言語学的手法によっても確認することができる。

さて、以上のような北琉球祖語の祖形の再建結果は、(本土諸方言の事実を考慮せずに) 琉球語の音対応の観察に基づいて得られたものである。ところでこのようにして導き出された祖形は、本土の多くの諸方言における同源語から推定される祖形とは、かならずしも一致を見せない。

たとえば本節で導き出した北琉球祖語の「水、蚯蚓、裾、薬」には、北琉球の諸方言を用いて再建すると、次の (15a) に示すような祖形が得られる。これは、すでにこの節で見た通りである。この祖形と比較・対照するために、今、本土方言の代表として現代共通語を選び、これらに対応する語形を挙げれば、(15b) のようになる。

(15) 北琉球祖語と現代共通語の語形の比較

	水	蚯蚓	裾	薬
a. 北琉球祖語	* <u>me</u> <sup>n</sup> zu	* <u>meme</u> <sup>n</sup> zu	* <u>soso</u>	* <u>kusori</u>
b. 現代共通語	mizu	mimizu	suso	kusuri

(15b) の現代共通語をはじめとする多くの本土諸方言の同源語をもとに推理すれば、本土祖語における「水、蚯蚓、裾、薬」の祖形は、\*mi<sup>n</sup>du、\*mimi<sup>n</sup>zu、\*suso、\*kusuri という結果に導かれる。すなわち、「水」の第1音節、「蚯蚓」の第1、第2音節の母音には (\*me ではなく)

\*mi、「裾」の第1音節、「薬」の第2音節の母音は(\*soではなく)\*suを再建することができる。

これに対し、琉球語のデータに基づいて北琉球祖語の祖形を再建すれば、(15a)に示されたように、「水」の第1音節、「蚯蚓」の第1、第2音節の母音は、(\*miではなく)\*meであり、「裾」の第1音節、「薬」の第2音節の母音は(\*suではなく)\*soである、という帰結に導かれる。

このことは、「水」「蚯蚓」「裾」「薬」の日琉祖語におけるこれらの語の祖形は、それぞれ \*me<sup>n</sup>du (水)、\*meme<sup>n</sup>zu (蚯蚓)、\*soso (裾)、\*kusori (薬) だった可能性も示唆している。もし現代の本土諸方言の mizu ~ mi<sup>d</sup>zu (水)、mimizu (蚯蚓)、suso (裾)、kusuri (薬) などの語の下線部の音節が、日琉祖語の段階では実は(本土諸方言から導かれる)\*miや\*suではなく、それぞれ(琉球諸語・諸方言から導かれる)\*meや\*soだったとするならば、これは通時的に見て重要な意味を持つ。服部(1979)、Pellard(2013)、五十嵐(2021)が指摘するように、以上の事実は、日琉祖語の段階から現代に至るいずれかの段階において、\*me<sup>n</sup>du > \*mi<sup>n</sup>du (水)、\*meme<sup>n</sup>zu > \*mimi<sup>n</sup>zu (蚯蚓)、\*soso > \*suso (裾)、\*kusori > \*kusuri (薬) のような変化が本土のほうに生じたことを意味するからである。つまり、\*e > i や \*o > u などの「狭母音化」が、本土方言側にも生じた可能性があることを、この節で述べた琉球語の再建結果が示唆することになるのである。

以上の事実から、琉球語のデータを用いながら比較言語学的方法によって導き出された結論は、琉球語のみならず日本語の音韻史のほうにも、あらたな問題提起を行うことにつながり得る。このような意義ある問題提起を行うためにも、琉球語の祖形再建にあたってわれわれは、本土諸方言の同源語の事例をいたずらに持ち出して結論づけることは避け、まず琉球語のデータだけを用いて比較言語学的考察を行い、各語の祖形を導き出していく努力をする必要がある。すなわち琉球語の比較言語学的考察を行う際には、本土諸方言の言語事実からもたらされる先入観をできる限り排除しながら、その通時的考察を行っていく必要があるのである。

### 3. 首里方言の音節構造変化

#### 3.1. 二種類の音節構造変化

さて、首里方言をはじめとする沖縄本島南部の諸方言では、ある特定の条件を満たした語群の語頭音節の狭母音が脱落し、その結果それらの語の音節構造が大きく変化したことが知られている。この音節構造の変化は、Thorpe(1983)、Pellard(2013)などが、琉球祖語の祖形再建にあたって、その母音の音価推定のための重要な手がかりと見做しているものである。次の首里方言のデータは、その音節構造の変化を経て現代の語形に至ったと考えられる語の一例である。

(16) 音節構造の変化を経たと考えられる首里方言の語例<sup>8)</sup>

- |              |          |
|--------------|----------|
| a. ʔɲma (馬)  | ʔɲni (稲) |
| b. ɲkaçi (昔) | ɲsu (味噌) |

これら現代の首里方言の語形は、それぞれの祖形の語頭音節にもともと存在していた狭母音(\*u あるいは \*i) の脱落を契機にして各語の音節構造が変化した結果、生じたものである

(Thorpe 1983、Pellard 2013)。たとえば (16) に挙げられた「馬」と「昔」は、その祖形においてそれぞれ \*ʔuma、\*mukasi のように、語頭音節の主母音に狭母音の \*u を持っていたことが推定される。そしてその語頭音節の狭母音 \*u が脱落した結果、現代の ʔmma、ŋkaci のような語形に変化したと考えられる。同様に、「稲」と「味噌」も \*ʔine、\*miso のように、もともとその第 1 音節の主母音に狭母音の \*i を持っていた。しかしその狭母音 \*i が脱落した結果、現代の ʔni、ŋsu のような語形に変化したと考えられる。

さて、(16a) と (16b) に示した語頭音節の狭母音 \*u、\*i の脱落には、ある共通点がある。いずれもその変化の生起条件に何らかの形で \*m や \*n などの鼻音が関与している<sup>9)</sup>という点である。またその変化の結果、最終的に [m] [ŋ] [ŋ] のような、鼻音がその主音となる音節が語頭にあらたに生じていることも、両者の重要な共通点である。

しかしながら、その生起条件を詳細に検討してみると、(16a) と (16b) の音節構造は、それぞれ異なる変化によって生じたものと結論づけなければならないことが判明する。なぜなら、(16a) の \*ʔuma > ʔmma (馬) や \*ʔine > ʔni (稲) という変化は、脱落する語頭音節の狭母音 (\*u あるいは \*i) の直後の子音が鼻音 (\*m、\*n) である、という条件のもとで生じているのに対し、(16b) の \*mukasi > ŋkaci (昔) や \*miso > ŋsu (味噌) の変化は、当該の狭母音の直前の子音が鼻音である、という条件のもとで生じているからである。

つまり、(16a) と (16b) の語に過去に生じた変化は、同じ一つの変化なのではなく、独立して生じた 2 種類の別の変化なのである。したがって、それらの変化が起こった年代も異なる可能性が高い。そのため琉球語の比較言語学的考察においては、これらの変化は厳密に区別して論じられなければならない。そこで本稿では、(16a) と (16b) の 2 種類の変化を、それぞれ「音節構造変化その 1」、「音節構造変化その 2」と区別して呼びながら議論を進めることにする。

この 2 種類の異なる変化によって、(16) に挙げられた首里方言のそれぞれの語が、どのような変化を遂げて現代の語形に至ったかを推定して示したのが、次の (17) である。(なお、(17a) に見られる X の記号は、当該の狭母音が脱落した後に残された 1 モーラ分のスロットを示すために、仮に作られた抽象記号である。)

#### (17) 首里方言に生じた 2 種類の音節構造の変化の過程

##### a. 音節構造変化その 1 :

\*ʔuma > ʔXma > ʔmma > ʔmma (馬)

\*ʔine > ʔXne > ʔnne > ʔni (稲)

##### b. 音節構造変化その 2 :

\*mukasi > mkasi > ŋkaci (昔)

\*miso > mso > ŋsu (味噌)

本稿では以下、(17a) の「音節構造変化その 1」を動機づけた変化を次の (18a) のように、(17b) の「音節構造変化その 2」のそれを次の (18b) のように記述しておく。



(18) 首里方言に生じた2種類の音節構造変化を動機づけた母音の脱落変化

a. 音節構造変化その1:

語頭から2つめの音節のオンセットが鼻音性を持つ音で、かつ語頭音節の主母音が狭母音 (\*u または \*i) の場合に、その語頭音節の主母音が脱落する。

b. 音節構造変化その2:

語頭の音節のオンセットが鼻音で、かつその音節の主母音が狭母音 (\*u または \*i) の場合に、その主母音が脱落する。

このように、過去に首里方言に起こったと思われる音節構造の変化には、(18)に示された2種類の異なる変化がかかわっている。以下本稿では、3.2節で(18a)の「音節構造変化その1」について、引き続き3.3節で(18b)の「音節構造変化その2」について、それぞれ検討していく。

3.2. 首里方言の音節構造変化 その1

3.2.1. その生起条件の検討

まず、(18a)に示された「音節構造変化その1」に的を絞って考えてみよう。次の(19)は、過去にこの変化の影響を経たと思われる首里方言の語群を示している<sup>10)</sup>。

(19) 首里方言における「音節構造変化その1」を経たと考えられる語<sup>11)</sup>

ʔɲma (馬) ʔɲmaga (孫) ʔɲmi (膿) ʔɲmu (甘藷・さつまいも) ʔɲnadzi (鰻)  
 ʔɲni (稲) nutɕi ~ ʔinutɕi (命) ʔɲbusaN (重い) ʔɲɲdi: (蕪) ʔɲdzana: (どもり)  
 ʔɲdzu (伊集 (植物の一種)) ʔidzu の口語)

この変化の生起条件については、すでに国立国語研究所(編)(1963:44)に以下のような記述がある(なお、ʔN, ʔNNは国立国語研究所(編)(1963)によって使用されている音韻記号で、それぞれ本稿の[ʔɲ]あるいは[ʔɲ], [ʔɲɲ]などの音連続を示す)。

(20) ʔN, ʔNNに続くことのできる音素は「閉鎖を伴う有声の子音素」に限られる。すなわち m, n, b, d, z, g の6個である。(国立国語研究所(編)1963:44)

つまり、(18a)の「音節構造変化その1」にかかわる語頭音節の狭母音(\*u または \*i)の脱落は、直後に「閉鎖を伴う有声の子音」が続く場合に起こる、と国立国語研究所(編)(1963)には明記されている。

それでは、閉鎖を伴わない有声の子音の場合はどうであろうか。たとえば鼻音以外の共鳴音 \*r や \*j は同様な変化を引き起こしたかを、まず検討してみよう。結論から言えば、語の第2音節のオンセットが \*r や \*j の場合には、この(18a)の「音節構造変化その1」は生じていない。次の(21)の首里方言の語例から明らかのように、たとえば ʔura (裏)、ʔiru (色)、ʔija (胎盤)などの語頭の狭母音(\*u または \*i)は脱落していない。

(21) 現代首里方言の語頭の狭母音が脱落しない例 (その1)

ʔura (裏)    ʔiritɕi<sup>うろこ</sup> (鱗)    ʔiritɕa<sup>いらか</sup> (覺)    ʔirana (鎌)    ʔiri (錘)    ʔiru (色)  
ʔija (胎盤)

つまり、後続音節のオンセットが鼻音である \*ʔuma (馬)、\*ʔine (稲) などの場合は \*ʔuma > ʔɸma (馬) や \*ʔine > ʔɸni (稲) のように、その語頭音節の狭母音が脱落して音節構造の変化が生じたのに対して、同じ共鳴音であっても鼻音以外のもの (\*r や \*j) は、同様な変化を生じさせる要因とはならなかったのである。

また (20) には、後続の音が「閉鎖を伴う有声の子音音素」の場合にこの変化が起こったと記述されているが、同じ閉鎖を伴う音であってもそれが無声の場合には、語頭音節の狭母音 (\*u または \*i) は脱落していない。このことは、次の (22) の首里方言の語例から確認できる。

(22) 現代首里方言の語頭の狭母音が脱落しない例 (その2)

ʔuta (歌)    ʔutaki<sup>うたき</sup> (御岳・聖地)    ʔutɕi (内)    ʔutɕiri<sup>おき</sup> (燠)  
ʔikusa (戦)    ʔitɕa (烏賊)    ʔitɕa (板)    ʔitɕi (息)    ʔitɕimuɕi (獣)  
ʔitɕubi (苺)    ʔitɕu: (糸)    ʔitɕuku (従兄妹)    ʔitsitai (5人)

この (22) を見ると、(ʔuta (歌) や ʔikusa (戦) のように) 無声音の \*t や \*k が後続音節のオンセットにある場合には、その語頭音節の主母音 (\*u または \*i) は脱落を遂げていないことが分かる。すなわち、(18a) に記述された語頭音節の狭母音 (\*u または \*i) の脱落は、その後続音節のオンセットの阻害音が有声の場合のみに生じ、それが無声の場合には生じなかったことになる。

さて、ここで我々は次のような疑問を抱く必要があるだろう。(18a) の「音節構造変化その1」は、最終的に \*ʔuma > ʔɸma (馬) や \*ʔine > ʔɸni (稲) のように、[ɸ] [ɸ] [ɸ] のような鼻音が音節主音となるような、あらたな音節を生み出す結果を招いている。鼻音 (\*m, \*n) がそのような音節の引き金となることは理解できるが、いったいなぜ阻害音 (\*b, \*d, \*g, \*z)、しかもその有声のものだけが、このような変化を誘発したのだろうか。

そもそも「鼻音」と「有声の阻害音」は、自然音類 (natural class) を形成しているとは言い難い。両者に共通の特徴は「有声である」という点だけである。それにもかかわらず、「鼻音」と「有声の阻害音」がまとまってひとつの音類を形成し、(18a) の「音節構造変化その1」の条件となり得るとするのは、いったいなぜだろうか。また同じ阻害音であっても、無声のものは同様な変化を条件づけることがないのは、どうしてなのだろうか。

本稿ではこの事実を、次のような仮説を立てることによって説明しておきたい。

その絶対年代、すなわちそれが具体的にいつ生じたのか、という点については不明とせざるをえないが、この (18a) の「音節構造変化その1」が生じた時代において、その音韻体系内の有声の阻害音には鼻音 (\*m, \*n) と共通した特徴があった、という仮説である。本稿では、有声の阻害音はかつて前鼻音的な性質を持っていた<sup>12)</sup>と想定し、以下そのような前鼻音的な子音を

\*<sup>m</sup>b、\*<sup>n</sup>d、\*<sup>l</sup>g、\*<sup>n</sup>z のように、当該の子音の前（左上）に、後続の子音と調音点と同じ鼻音要素を付け加えて示すこととする。したがって、たとえば現代首里方言の ʔmbusaN（重い）、ʔn̄ndi:（蕪）、ʔndzana:（どもり）、ʔndzu（伊集（植物の一種）などの語には、次のような祖形を再建する。

(23) 北琉球祖語の祖形案（その5）<sup>13)</sup>

\*ʔu<sup>m</sup>busaN（重い） \*ʔu<sup>n</sup>de（蕪） \*ʔi<sup>l</sup>gana（どもり） \*ʔi<sup>n</sup>zo~\*ʔi<sup>n</sup>do（伊集（植物））

そこで以下、北琉球祖語の体系において鼻音と有声の阻害音とがかつて共通して持っていたと考えられる特徴を、「鼻音性 (nasality)」と呼ぶこととする。そして、「鼻音 (\*m, \*n)」と「有声の阻害音 (\*<sup>m</sup>b、\*<sup>n</sup>d、\*<sup>l</sup>g、\*<sup>n</sup>z)」とは、少なくとも (18a) の「音節構造変化その1」が生じた時点に至るまでは、この「鼻音性」という特徴を共有していたと推定する。つまり本稿では、北琉球祖語では鼻音と有声の阻害音は、かつては「鼻音性」という特徴を共有する「自然音類」を形成していたと考えるのである。

以上をまとめて、(18a) の「音節構造変化その1」を引き起こした狭母音の脱落を以下にあらためて記述しなおすと、次の (24) のようになる<sup>14)</sup>。なお、以下、PNRは北琉球祖語 (Proto-Northern Ryukyuan) を、PSOは沖縄本島南部祖語 (Proto-Southern-Okinawan)<sup>15)</sup>を示している。

(24) 狭母音の脱落：語頭音節の狭母音 (\*u あるいは \*i) が、後続音節のオンセットに鼻音性を持つ要素がきた場合に、脱落した。

PNR {+syllabic, +high} > PSO ø / # ʔ \_\_\_\_\_ {-syllabic, +nasal}

すなわち本稿では、この変化が生じる条件を「鼻音と有声の阻害音の前」ではなく、「鼻音性を持つ要素の前」、と記述し直す提案を行ったことになる。

以上、本稿では、(19) に示した首里方言の語群に過去に生じた音節構造の変化は、（それが鼻音であれ、有声の阻害音であれ）後続音節のオンセットの子音が何らかの鼻音性を持つ、という条件のもとに生じた<sup>16)</sup>ことを提案した。

### 3.2.2. 「音節構造変化 その1」にかかわる北琉球祖語の祖形再建

さて、それでは (24) の狭母音の脱落変化によって最終的に消滅してしまった語頭音節の母音が、北琉球祖語の段階において \*i であったのか、それとも \*u であったのかは、どのように推定すればよいのだろうか。これは首里方言の体系内部を検討しても判断することはできず、やはりそのためには、北琉球の諸方言を用いた比較再建が求められる。

次の (25)、(26)、(27) は、(19) に挙げられた首里方言の語群の同源語を、それぞれ奄美大島、徳之島、沖永良部島の資料から抜粋して示したものである。（なお、下線の引かれた語については後述する）以下、本稿を通じて、当該の語の同源語が辞書や報告書の見出し語にない場合、あるいは各体系で使用される対応語があきらかに同源語ではないと判断される場合には、その部分

を --- で示す方針とする。)

(25) 奄美大島大和浜方言における (19) の語群の同源語

ʔma: (馬)    ʔmaga (孫)    ʔumi (膿)    ʔumu (里芋)    ʔonagi (鰻)<sup>17)</sup>  
ʔni: (稲)<sup>18)</sup>    ʔinju<sup>ti</sup> (命)    ʔubusari (重い)    ʔudi (蕪)    ʔigja (どもり)  
ʔidzu (植物の一種、ピンクがかった肌の硬質の木)

(26) 徳之島浅間方言における (19) の語群の同源語

ʔma: (馬)    ʔma:ga (孫)    ʔumi: (膿)    --- (芋)    ʔuna:gi (鰻)  
ʔini: (稲)    ʔinutsi: (命)    --- (重い)    --- (蕪)    --- (どもり)  
--- (伊集 (植物の一種))

(27) 沖永良部島知名方言における (19) の語群の同源語

ʔma: (馬)    ʔma:ga (孫)    ʔuŋki (膿)    ʔumu: (芋)    --- (鰻)  
ʔini: (稲)    ʔinut<sup>ti</sup>: (命)    ʔubusaN (重い)    --- (蕪)    ʔi:gjani (どもり)  
--- (伊集 (植物の一種))

これら北琉球の3方言の語形をもとにして、「膿、芋、鰻、重い、蕪」の語頭音節には \*ʔu を、「稲、命、どもり、伊集 (植物の一種)」の語頭音節には \*ʔi を、それぞれ再建することができる。

さて、ここで (25) ~ (27) のデータ中の下線の引かれた2つの語—すなわち「馬」と「孫」—を見ると、これらはいずれの方言においても、その語頭音節の母音がすでに脱落してしまっている。たとえば「馬」は、(25) ~ (27) のすべての方言において ʔma: であり、「孫」は奄美大島で ʔmaga、徳之島と沖永良部島で ʔma:ga である。これらには語頭音節の狭母音の脱落が生じて、首里方言と似たような音節構造の変化が過去に生じたことが推定される。

一見したところ (少なくともこの (25) ~ (27) に挙げられたデータからは)、この「馬」と「孫」の語頭音節の狭母音の脱落変化は、北琉球の諸方言が分岐・発展する前の段階 (すなわち北琉球祖語) において、すでに生じていたかのように見える。しかし次に挙げた与論島のデータが、その可能性を否定する。(28) の下線の引かれた語形が示しているように、与論島の「馬」と「孫」には、それぞれ ʔuma (馬)、ʔumaga (孫) のように、その語頭音節の主音に u が出現している<sup>19)</sup> からである。

(28) 与論島麦屋東区における (19) の語群の同源語

ʔuma (馬)    ʔumaga (孫)    ʔuN<sup>tu</sup> (膿)    ʔuN (芋)    --- (鰻)  
--- (稲)    ʔinut<sup>ti</sup> (命)    ʔuNsaN (重い)    ʔudui (蕪)    --- (どもり)  
ʔidzu: (伊集 (植物の一種))

この (28) の与論島のデータに基づいて、北琉球祖語における「馬」と「孫」の祖形の語頭音節の主母音には \*u を再建することができる。またこの与論島のデータが、この「馬」と「孫」の

語頭音節には、北琉球の諸方言が分岐・発展する前の段階（すなわち北琉球祖語）において、狭母音 \*u が確かに存在していた<sup>20)</sup>ことを示している。

さて、(25)～(28)に挙げられた北琉球諸方言のデータに基づいて比較言語学的な考察を行い、(19)に挙げられた現代首里方言の語群の北琉球祖語における祖形を再建すれば、次に示すようなものになる。

(29) 北琉球祖語の祖形案（その6）

\*ʔuma (馬)    \*ʔumaga (孫)    \*ʔumi (膿)    \*ʔumu (芋)    \*ʔunagi (鰻)  
 \*ʔine (稲)    \*ʔinoti (命)    \*ʔu<sup>m</sup>busan (重い)    \*ʔu<sup>n</sup>de～\*ʔu<sup>n</sup>doi～\*ʔu<sup>n</sup>dui (蕪)<sup>21)</sup>  
 \*ʔi<sup>n</sup>gana (どもり)    \*ʔi<sup>n</sup>do～\*ʔi<sup>n</sup>zo (伊集：植物の一種)

これらの祖形は、いずれも語頭音節の主音に狭母音 (\*u または \*i) を持ち、さらにそれに続く音節のオンセット部分に鼻音 (\*m, \*n)、ないしは前鼻音の特性を持つ阻害音 (\*<sup>m</sup>b, \*<sup>n</sup>d, \*<sup>n</sup>g, \*<sup>n</sup>z) を持っていたと、本稿では論じた。

3.3. 首里方言の音節構造変化 その2

3.3.1. その生起条件の検討

さて、次に(18b)に示された「音節構造変化その2」のほうに焦点を当てよう。この音節構造の変化を動機づけた狭母音 (\*u または \*i) の脱落変化は、\*mukasi > ŋkaçi (昔)、\*miso > ŋsu (味噌)、\*ni<sup>n</sup>gasaN > ŋdzasaN (苦い)などに典型的に示されるように、語頭音節のオンセットに鼻音 (\*m または \*n) が存在した場合に生じたと考えられる。過去にこの変化の影響を経たと思われる首里方言の語を示せば、次のようになる。

(30) 首里方言における「音節構造変化その2」を経たと考えられる語<sup>22)</sup>

ŋkaçi (昔)    ŋkadzi<sup>むかで</sup> (百足)    ŋke:kadzi (向かい風)    ŋnatu (港)  
 ŋtɕa (土)    ŋdzari (乱れ)    ŋdzasaN (苦い)    ŋdzana (ほそばわだん (植物名))

これらの語が、北琉球祖語の段階でそのオンセットに鼻音を持つ音節 (\*mu, \*mi, \*ni など) を語頭に持っていたことは、次の奄美大島の大和浜方言の同源語を検討すれば確認できる。

(31) 奄美大島大和浜方言の例<sup>23)</sup>

mok<sup>h</sup>açi (昔)    mok<sup>h</sup>adze (百足)    muk<sup>h</sup>ek<sup>h</sup>adze (向かい風)    --- (港)<sup>24)</sup>  
 mi<sup>h</sup>tɕa (土)    midare (不潔・乱れ)    nigjasari (苦い)    nigjana (ほそばわだん (植物名))

さて、(30)に挙げた首里方言の語群に生じた「音節構造変化その2」は、前節で扱った(24)の変化と同じく、その語頭音節の主母音 (\*u または \*i) が脱落したことをきっかけに生じたものである。ところが詳しく検討すると(30)の語群に起こった変化は、(24)の場合とはその音条件がかなり異なる。

まず (24) の変化は、(たとえば \*ʔuma > ʔɯma (馬)、\*ʔine > ʔɯni (稲)、\*ʔu<sup>m</sup>busan > ʔɯbusaN (重い) などの例から分かるように) 直後の音節のオンセットが鼻音性を持つ場合に生じたものである。これに対し (30) に挙げられた語群に起こった語頭音節の狭母音 (\*u または \*i) の脱落変化は、\*mukasi > ɲkaci (昔)、\*miso > ɲsu (味噌)、\*ni<sup>o</sup>gasaN > ɲdzasaN (苦い) のように、その語頭の音節のオンセットの子音が鼻音 (\*m または \*n) から始まる場合に生じたものである。

さらに (24) に記述された狭母音の脱落とは異なり、(18b) の語頭音節の狭母音の脱落は、後続する子音に制限が少ない<sup>25)</sup>。前節では (24) の変化は、後続音節のオンセットの子音が「鼻音性」を持つ場合にのみ生じたことを論じた。これに対して (30) に例を挙げた語群に生じた変化は、後続音節のオンセットの子音が鼻音性を持つ場合 (\*minato > ɲnatu 港、\*mi<sup>a</sup>dare > ɲdzari 乱れ、\*ni<sup>o</sup>ga-saN > ɲdza-saN 苦い) だけではなく、それが無声の阻害音の場合にも生じている。このことは、たとえば (30) の \*mukasi > ɲkaci (昔) や \*mi<sup>a</sup>ta > ɲta (土) などの例からも確認できる。

さらに首里方言のデータを子細に検討してみると、実はこの (18b) の「音節構造変化その2」の音条件には、後続の音節の主母音に制限がある<sup>26)</sup>ことが明らかになる。後続の音節の主母音が狭母音 (\*u または \*i) の場合<sup>27)</sup>には、この変化は生じていないからである。このことは、次に示した現代首里方言の語群を検討すると明らかである。

(32) 現代首里方言の語頭音節の主母音が脱落していない語

muci (虫)    muciru (筵)<sup>むしろ</sup>    musubi: (契約)    mudzi (麦)    mitei (道)  
mimi (耳)    nutei (横糸・貫木)    nidziri (右)    niçi (北)

たとえば (32) の muciru (筵)、mimi (耳)、niçi (北) などが、もし過去にこの変化の影響をこうむっていたとすれば、<sup>x</sup>ɲciru (筵)、<sup>x</sup>ɲmi (耳)、<sup>x</sup>ɲci (北) (本稿を通じて上付きの <sup>x</sup> という記号は、「現実の語形とは異なる」ことを意味する。) のような語形となって現れるはずである。しかし現実にはそのような変化は遂げていないことは、(32) の語例から見て取れる。

したがって (18b) の「音節構造変化その2」を動機づけた語頭音節の狭母音 (\*u または \*i) の脱落変化は、「後続音節の主母音が非狭母音である」という条件のもとに生じた、と考える必要がある。後述するが、この音節構造の変化が起こる重要な条件は、「語頭音節の主母音よりも、それに続く音節の主母音のほうがかきこえ度 (sonority) が高い」というものである。

さて、現代の首里方言のデータを検討すると、一見したところ後続音節の主母音が狭母音 (\*u または \*i) の場合にも、この変化が生じたかのように見える例が確かに存在している。次の (33) に挙げた語群がそれにあたる。

(33) 現代首里方言の (18b) によって語頭の狭母音が脱落した語

a. ɲni (胸)    ɲni (建物の棟)    ɲdzi (棘)  
b. ɲteu (一昨年)    ɲnu (蓑)    ɲdzu (溝)    ɲsu (味噌)

たとえば (33a) の  $\eta ni$  (胸) や  $\eta d zi$  (棘) の場合、脱落した狭母音があったと思われる音節の後ろに続く音節の主母音は  $i$  であるし、(33a) の  $\eta t u$  (一昨年) や  $\eta s u$  (味噌) の場合は、それが  $u$  である。これらの音節の主母音はすべて狭母音であるのにも関わらず、これらの語には「音節構造変化その2」が生じている。

しかしながらこれらの母音は、もともと狭母音であったのではなく、北琉球祖語の段階では非狭母音の  $*e$  や  $*o$  であったものが、本稿の (2) に記述した狭母音化 ( $*e > i$   $*o > u$ ) によって、後世になってから狭母音へと変化したものである。このことは、比較言語学的方法によって検証できる。次の奄美大島大和浜方言のデータは、この方言における (33) に挙げた首里方言の語群の同源語を示したものである。

(34) 奄美大島大和浜方言における (33) の同源語

- a.  $muni$  (胸)     $muni?agi$  (建物の棟上)     $nigi$  (棘)  
 b.  $mit^h unat^h e$  (一昨年)     $mjo:$  (蓑)     $midzo$  (溝)     $misu$  (味噌)

まず (34a) の各語の第2音節の主母音を見ると、( $nigi$  (棘)<sup>28)</sup>の一例を除き) 中舌母音の  $i$  を持っていることが分かる。つまりこれらの語の第2音節の主母音は、もともとは(北琉球祖語の段階では) 狭母音の  $*i$  ではなく、 $*e$  であったのである。

(34b) の語についても同様なことが言える。現代奄美諸島の諸方言では、狭母音化 ( $*e > i$   $*o > u$ ) に伴って非狭母音(つまり  $*a$ ,  $*e$ ,  $*o$ ) の前の無声閉鎖音が有気音化して出現する。すなわち本来の無声閉鎖音の  $*t$  は、現代において有気音化した  $t^h$  として出現するのである(例: 大和浜方言の例:  $?it^h a$  板,  $t^h i:$  手,  $t^h uci$  年)。(34b) に挙げた  $mit^h unat^h e$  (一昨年)<sup>29)</sup> の第2音節の  $t^h u$  は、現代大和浜方言でこの有気音化した  $t^h$  を持っていることから、この音節の主母音は、もともと(狭母音の  $*u$  ではなく) 非狭母音の  $*o$  であったことが分かる。

また、同じ (34b) の「蓑」と「溝」も、 $mjo:$  (蓑)<sup>30)</sup>、 $midzo$  (溝) のようにもももとの第2音節に当たる部分に  $o$  が出現していることから見て、その北琉球祖語における第2音節の主母音も(狭母音の  $*u$  ではなく) 非狭母音の  $*o$  であったと推定される。

残る  $misu$  (味噌) についても、この語の第2音節の  $su$  が、祖語において ( $*su$  ではなく)  $*so$  であったことは、大和浜方言のデータから明らかである。これには前節の (11) で記述した、舌頂音をオンセットに持つ音節の主母音  $*u$  の前進化が関与している。松森 (1992: 7) でも論じたように、琉球祖語における舌頂音の子音直後の  $*u$  は現代の奄美大島では、(11a) の  $*u > i$  という前進化の結果、中舌母音  $i$  へと変化を遂げている。すなわち本来の  $*su$  の音節は、 $*su > si$  のように変化し、現代の奄美大島では  $si$  という音節で出現するのである。次の (35) に挙げた大和浜方言の語例は、このことを示している。

(35) 奄美大島大和浜方言における  $*su$  を含む語

- $\underline{si}$ : (巢)     $?u\underline{si}$  (臼)     $\underline{si}si$  (煤)     $\underline{si}na$  (砂)     $\underline{si}mi$  (炭)     $\underline{si}nori$  (水雲)

たとえば  $?u\underline{si}$  (臼)、 $\underline{si}si$  (煤) の下線部からも分かるように、北琉球の祖体系における  $*su$  とい

う音節は、現代の大和浜方言において、中舌母音の *i* をその内部に持つ *si* という音節で出現している。

さて、ここで (34b) にある *misu* (味噌) を見てみると、この語は現代の大和浜方言において、<sup>\*</sup>*mis<sub>i</sub>* のような語形では出現していない。つまりその語の第2音節は、北琉球祖語の段階では、(狭母音をその内部に持つ <sup>\*</sup>*su* ではなく) 非狭母音を持つ <sup>\*</sup>*so* であったと考えられる。すなわち「味噌」という語の祖形は、(<sup>\*</sup>*misu* ではなく) <sup>\*</sup>*miso* でなければならないことになる。

以上をまとめると、(18b) に記述された変化は①語頭音節の主母音が狭母音であり、②かつそれに続く第2音節の主母音が非狭母音 (<sup>\*</sup>*a*、<sup>\*</sup>*e*、<sup>\*</sup>*o*) である、という2つの条件が両方ともそろった場合にはじめて生じた変化である。本稿ではこのような条件を、単語内部の連続した音節の間の「きこえ度」と関連させて、以下のように記述することを提案したい。

### (36) 「音節構造変化その2」(18b) の生起条件

語の第2音節の主母音が、第1音節の主母音より「きこえ度」が高いこと。

すなわちこの変化には、語内部の2つの音節間の相対的な強さが関与しているのである。

すでに (30) と (33) で見てきた語群、すなわち現代首里方言の *ŋtɕa* (土)、*ŋni* (胸)、*ŋnu* (蓑) などの語の祖形は、(少なくとも「音節構造変化その2」が生じた時点において) この (36) に示された条件に合致していたと推定できる。これらの語の祖形はすべて、その第2音節の主母音のきこえ度が語頭音節のそれより高かったために、「音節構造変化その2」の影響をこうむることになったと考えられる。したがってこれらの語には、(たとえば <sup>\*</sup>*mita* (土)、<sup>\*</sup>*mune* (胸)、<sup>\*</sup>*mino* (蓑) のように) その語頭音節に狭母音 (<sup>\*</sup>*u* または <sup>\*</sup>*i*) を、かつ第2音節に非狭母音 (<sup>\*</sup>*a*、<sup>\*</sup>*e*、<sup>\*</sup>*o*) を持つような祖形を、それぞれ再建する必要がある。

以上のような考察に基づいて、「音節構造変化その2」を引き起こした狭母音の脱落変化 (18b) をあらためて記述し直すと、以下ようになる<sup>31)</sup>。

### (37) 語頭音節の狭母音の脱落：鼻音から始まる語頭音節の主母音<sub>①</sub>のきこえ度が、後続音節の主母音<sub>②</sub>のそれより小さい場合に、語頭音節の主母音<sub>①</sub>が脱落した。

PNR {+syllabic, +high}<sub>①</sub> > PSO  $\emptyset$  /  
# {-syllabic, +nasal} \_\_\_\_ C {+syllabic, -high}<sub>②</sub>

また以上の議論に基づき、「音節構造変化その2」を動機づけたこの (37) と本稿の (2) に示した狭母音化との変化の順番 (相対年代) についても、ここで推定することが可能となった。「音節構造変化その2」は、それが生じた時代において、後続音節の主音が非狭母音 (つまり <sup>\*</sup>*a*、<sup>\*</sup>*e*、<sup>\*</sup>*o*) だったと考えなければならない。すなわち、次のような変化の相対年代が推定できることになる。



(38) 「音節構造変化その2」と関連した二種類の変化の相対年代

語頭音節の狭母音の脱落 (37) > 狭母音化 (\*e>i, \*o>u) (2)

### 3.3.2. 「音節構造変化その2」にかかわる北琉球祖語の祖形再建

さて、ここで比較言語学的考察によって、あらためて (30)、(32)、(33) に挙げた現代の首里方言の語群の祖形再建を試みよう。

まず、(32) に挙げられた首里方言の *muciru* (筵)、*mimi* (耳)、*nici* (北) などについてだが、これらが <sup>x</sup>*m̄**ci**ru* (筵)、<sup>x</sup>*m̄**mi* (耳)、<sup>x</sup>*n̄**ci* (北) のように変化を遂げてはいない理由は、前節の議論から明らかだろう。これらの語は、北琉球祖語の段階において (\**musiro* (筵)、\**mimi* (耳)、\**nisi* (北) のように) その語頭音節の主音のみならず、第2音節の主音にも狭母音 (すなわち、きこえ度の低い母音) を持っていたため、(36) に記述された生起条件を満たしていなかった。そのためこれらの語は、(37) に示された狭母音の脱落変化の影響を免れたと思われる。

このような推論に基づいて、(32) の語群には、その語頭音節と第2音節がともに狭母音 (\**u* または \**i*) を持つ、次のような祖形を建てることができる。

(39) 北琉球祖語の祖形案 (その7)

\**musi* (虫)    \**musiro* (筵)    \**musubi* (契約)    \**mu<sup>o</sup>gi* (麦)<sup>32)</sup>    \**miti* (道)  
\**mimi* (耳)    \**nuki* (横糸・貫木)    \**ni<sup>o</sup>giri* (右)    \**nisi* (北)

ちなみに、これらの祖形に対応する奄美大島大和浜方言における語群は次のとおりである。

(40) 奄美大島大和浜方言における (32) の同源語

*muci* (虫)    *muciro* (筵)    *musubi* (結び)    *mugi* (麦)    *miti* (道)  
*miN* (耳)    *nuki* (緯糸)    *nigiri* (右)    *nici* (北風)

これらの語はすべて、語頭音節の主母音に狭母音 (\**u* または \**i*) を持ち、なおかつ (*miN* (耳) の一例を除き) 後続の音節の主母音にも狭母音 (\**u* または \**i*) を持っていることが見て取れる。

次に、(37) の狭母音の脱落変化を経たと思われる (30) と (33) に示した語群について検討してみよう。これらの語群の現代の首里方言における語形を以下にまとめて示せば、(41) のようになる。

(41) 狭母音の脱落変化 (37) により音節構造が変化した現代首里方言の語群

- a. *ŋkaci* (昔)    *ŋkadzi* (百足)    *ŋke:kadzi* (向かい風)    *ŋnatu* (港)
- ŋtea* (土)    *ŋdzari* (乱れ)    *ŋdzasaN* (苦い)    *ŋdzana* (ほそばわだん (植物名))
- b. *ŋni* (胸)    *ŋni* (建物の棟)    *ŋdzi* (棘)
- c. *ŋteu* (一昨年)    *ŋnu* (蓑)    *ŋdzu* (溝)    *ŋsu* (味噌)

これら (41) の語のそれぞれについて、(37) の狭母音脱落によって最終的に消滅してしまっ

た語頭音節の主母音が、北琉球祖語の段階で \*i だったのか、それとも \*u だったのかを明らかにする必要がある。その目的のために、(41) に示した語群の同源語を奄美大島、徳之島、沖永良部島、与論島の各資料から抜粋して示したものが、次の (42) ~ (45) である。

(42) 奄美大島大和浜方言

- a. mok<sup>h</sup>aci (昔)    mok<sup>h</sup>adze (百足)    muk<sup>h</sup>ek<sup>h</sup>adze (向かい風)    --- (港)  
       mit<sup>h</sup>a (土)    midare (不潔・乱れ)    nigjasari (苦い)    nigjana (ほそばわだん (植物名))
- b. muni (胸)    muni-ŋagi (建物の棟上)<sup>33)</sup>    nigī (棘)
- c. mit<sup>h</sup>unath<sup>e</sup> (一昨年)    mjo: (蓑)    midzo (溝)    misu (味噌)

(43) 徳之島浅間方言<sup>34)</sup>

- a. muka:sī (昔)    muka:dza (百足)    muko: (向う)<sup>35)</sup>    mina:to (港)  
       ŋta: (土)    --- (乱れ)    --- (苦い)    --- (ほそばわだん (植物名))
- b. ni: (胸)    ni: (建物の棟)    ŋgi: (棘)
- c. mit<sup>h</sup>cuna:tī (一昨年)    mjo: (蓑)    mi:dzu (溝)    micu: (味噌)

(44) 沖永良部島知名方言

- a. mukaci (昔)    mukadzi (百足)    --- (向かい風)    --- (港)  
       mit<sup>h</sup>ca: (土)    --- (乱れ)    nigjasaN (苦い)    --- (ほそばわだん (植物名))
- b. ni: (胸)    ni: (建物の棟)    nigī (棘)
- c. mit<sup>h</sup>cunati (一昨年)    --- (蓑)    --- (溝)    micu: (味噌)

(45) 与論島麦屋東区方言

- a. mukaci-ja: (昔の家)<sup>36)</sup>    mukadi (百足)    mukke: (向かい)<sup>37)</sup>    minatu (港)  
       nit<sup>h</sup>ca (粘土質の赤い土)    --- (乱れ)    nidzasaN (苦い)    nidzana (ほそばわだん (植物名))
- b. ni: (muni)<sup>38)</sup> (胸)    ni: (muni)<sup>39)</sup> (建物の棟)    nigī (棘)
- c. nit<sup>h</sup>cu (一昨年)    çinju (蓑)    --- (溝)    micu (味噌)

これらのデータの比較から、(41) の「昔、百足、向かい風、胸、建物の棟」の語頭音節には \*mu を、「港、土、乱れ、一昨年、蓑、溝、味噌」の語頭音節には \*mi を、「苦い、ほそばわだん (植物名)、棘」の語頭音節には \*ni を、それぞれ再建することができる。

以上のような考察に基づいて、(41) に示した現代の首里方言の語群の北琉球祖語における祖形を再建すれば、次のようになる。

(46) 北琉球祖語の祖形案 (その 8)

- a. \*mukasi (昔)    \*mukade (百足)    \*mukai-kaze (向かい風)    \*minato (港)  
       \*mita (土)    \*mi<sup>h</sup>dare (乱れ)    \*ni<sup>h</sup>gasaN (苦い)    \*ni<sup>h</sup>gana (ほそばわだん (植物名))
- b. \*mune (胸)    \*mune (建物の棟)    \*ni<sup>h</sup>ge (棘)

c. \*mito (一昨年)    \*mino (蓑)    \*mi<sup>h</sup>zo (溝)    \*miso (味噌)

以上この節では、首里方言において \*mukasi > ŋkaci (昔)、\*mukade > ŋkadzi (百足)、\*mita > \*mitja > ŋtca (土)、\*mune > ŋni (胸)、\*miso > ŋsu (味噌) などの語群に過去に生じた想定される狭母音の脱落変化(すなわち「音節構造変化その2」を動機づけた(37)の変化)は、その出現条件として、次の2点を考慮しなければならないことを論じた。すなわち、①鼻音から始まる語頭音節の主母音が狭母音(\*u または \*i) であること、②かつそれに続く第2音節の主母音が非狭母音(\*a, \*e, \*o) であること、である。本稿ではこのことを、語内部の連続した2つの音節間の「きこえ度」と関連させ、「語の第2音節の主母音が語頭音節の主母音よりもきこえ度が高いこと」という条件(36)を提示した。そしてこの①、②の条件を両方とも満たした場合に限って、語頭音節の狭母音の脱落変化(37)が生じたことを論じた。また、この(37)の脱落変化は、首里方言に生じた狭母音化(\*e > i, \*o > u) よりも前に(歴史的に先に)生じたという、変化の相対年代についての考察もあわせて行った。

#### 4. まとめ

以上、現代首里方言の ?ŋma (馬)、?ŋni (稲)、?ŋbusaN (重い)、ŋkaci (昔)、ŋtca (土)、ŋsu (味噌) などの語に過去に生じた音節構造の変化に焦点を当て、そこに想定される語頭音節の狭母音(\*u または \*i) の脱落には、本稿の(24)と(37)に示した2種類のものがあり、互いにその生起条件が異なることを論じてきた。

まず現代首里方言の \*?uma > ?ŋma (馬)、\*?ine > ?ŋni (稲)、\*?u<sup>m</sup>busan > ?ŋbusaN (重い) などに生じた語頭音節の狭母音の脱落変化(24)には、「直後の音節(すなわち語の第2音節)のオンセットの子音が鼻音性を持つこと」という条件があると論じた。

これに対し \*mukasi > ŋkaci (昔)、\*mita > ŋtca (土)、\*mune > ŋni (胸)、\*miso > ŋsu (味噌) などに生じた語頭音節の狭母音の脱落変化(37)には、①語頭音節のオンセットが鼻音(\*m, \*n) で、しかも②直後の音節の主母音のほうが語頭音節のそれよりもきこえ度が高い、という生起条件があったということを論じた。

さらに本稿では前者の狭母音の脱落変化(24)について、それは \*?u<sup>m</sup>busan > ?ŋbusaN (重い)、\*?i<sup>h</sup>do > ?ŋdzu (伊集：植物の一種)、\*ni<sup>h</sup>gasaN > ŋdzasaN (苦い) などのように、「鼻音性」を持つ阻害音の前でも生じたことを論じ、北琉球祖語の体系では有声の阻害音は(\*<sup>m</sup>b, \*<sup>n</sup>d, \*<sup>h</sup>g, \*<sup>h</sup>z のように) 前鼻音的な特性を持っていた、とする仮説を提示した<sup>40)</sup>。また本稿では、少なくともこの「音節構造変化その1」を動機づけた狭母音の脱落変化(24)が生じた沖縄本島南部祖語(Proto-Southern-Okinawan)の段階に至るまで、その有声阻害音の持つ鼻音性は保持されていたことを推定した。本稿は、その変化が生じた時代、当該の祖体系における鼻音(\*m, \*n) と有声の阻害音(\*<sup>m</sup>b, \*<sup>n</sup>d, \*<sup>h</sup>g, \*<sup>h</sup>z) は、この「鼻音性」という特徴を共有する自然音類を形成していたことも論じた。

## 注

- 1) 本稿の内容は、2021年5月28日(金)にオンラインで開催された国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」プロンディー研究班の発表会における筆者の発表に基づいている。席上、参加者から頂戴したさまざまな助言を、本稿の内容に反映させることができた。ここに記して御礼申し上げたい。なお本稿は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」、「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」の研究成果の一部である。また本研究は、JSPS科研費 18K00588 および 19H00530 の助成を受けている。
- 2) 一例を挙げれば、「海、夢、糠、布、主、麦、耳」の祖形として五十嵐(2019)は、それぞれ \*omi、\*eme(?), \*noka、\*nono、\*nosi、\*mogi、\*memi のような案を提示しているのに対し、ローレンス(2020)は \*umi、\*ime、\*nuka、\*nuno、\*nusi、\*mugi、\*mimi などの祖形案を提示している。
- 3) 与論島については、この菊・高橋(2005)に付け加えて、山田(1995)の記述もあわせて参照した。しかしそのデータを示す際には山田(1995)の記述はカッコ内、あるいは注の内部で扱い、同じ島内の異なる体系からのデータが混在しないように心がけた。
- 4) この語がなぜ \*meme<sup>z</sup>u という祖形から期待される mimidzi でなく mimidzi なのかは、現時点では不明である。
- 5) 日琉祖語には \*du と \*zu の対立があった(したがって「水」の語末音節のヅと「蚯蚓」の語末音節のズは異なる音形にさかのぼる)と想定されるが、その違いが北琉球祖語に残されていたという証拠は今のところ得られていない。したがって北琉球祖語の体系には、(少なくとも現時点では)両者ともに \*<sup>h</sup>zu を再建しておく。
- 6) 現代首里方言では、本来の \*tu は、その変化の過程で \*tu > tsi のように、そのオンセットの子音 \*t を破擦音に変化させている(例: \*tuno > tsinu(角)、\*tume > tsi<sup>h</sup>mi(瓜))。これに対して、本来の \*to から生じた音節にはこの破擦音化は生じていない(例: tunai(隣)、tu<sup>h</sup>ci(年))。このことからこの破擦音化は、狭母音化よりも前(歴史的に先)に生じたと考えなければならない。
- 7) 首里方言(少なくとも国立国語研究所(編)(1963)に記述されている体系)においては、北琉球祖語における \*ti と \*tu、\*si と \*su とは、その破擦音、あるいは摩擦音の性質の違いによって、明確に区別されている。現代の首里方言では、\*ti と \*si のほうはそれぞれ t<sup>h</sup>i と ci として出現する(t<sup>h</sup>i:ca<sup>h</sup>sAN 近い、mi<sup>h</sup>t<sup>h</sup>i 道、ci<sup>h</sup>na 品、?u<sup>h</sup>ci 牛)のに対し、\*tu と \*su のほうはそれぞれ tsi と si として出現する(tsi:ci 月、?itsitai 5人、sina 砂、?u:si 白)。私見では、首里方言の祖先の体系においても \*tu や \*su は、現代の奄美大島に観察されるような中舌母音をその音節主音に持っていた(すなわち過去に \*t<sup>h</sup>i や \*s<sup>h</sup>i だった)時代があり、破擦音化はそれらがまだ中舌母音を持っていた時代に生じたものである。すなわち、本来の \*tu と \*su は、首里方言ではそれぞれ \*tu > \*t<sup>h</sup>i > \*tsi > tsi、\*su > \*s<sup>h</sup>i > si のような通時的変化の過程を経て、最終的に現代の tsi や si へと変化を遂げた、と私は推定している。これについては、稿を改めて論じたい。
- 8) 本稿を通じて、国立国語研究所(編)(1963)の音韻記号の /?N/ を [ʔn] [ʔŋ] [ʔŋʲ]、/N/ を [n] [ŋ] [ŋʲ] と音声表記する。すなわち本稿では、国立国語研究所(編)(1963)の /?Nma/ (馬)、/?Nni/ (稲)、/Nkazi/ (百足)、/Nsu/ (味噌)を、それぞれ ʔnma (馬)、ʔni (稲)、ŋkadzi (百足)、ŋsu (味噌)のように記述する。
- 9) たとえば \*?uma (馬) や \*?ine (稲) などの祖形には、脱落する狭母音の直後に \*m や \*n などの鼻音が存在しているのに対して、\*mukade (百足)、\*miso (味噌)、\*ni<sup>h</sup>gana (ほそばわだん(植物)) などの祖形には、脱落する狭母音の直前に鼻音(\*m や \*n)が存在している。
- 10) ちなみに、首里方言の datuN (抱く) と ma:saN (旨い) という語は、本稿で検討する諸方言においてその語頭に狭母音を出現させていない。この2語は、奄美大島の大和浜方言で、daki (抱く)、?massari (旨い)、沖永良部島知名方言で dakjuN (抱く)、ma:saN (旨い)、与論島方言で dakjuN (抱く)、masa<sup>h</sup>N (旨い) だからである。(なお徳之島の記述データの見出しの中には、この2語は含まれていなかった。)すなわち、(少なくとも本稿に挙げられた北琉球の諸方言のデータだけに基づいて)これらの語の語頭音節の主音に狭母音(\*u あるいは \*i)を再建し、北琉球祖語におけるこれらの祖形がたとえば \*?i<sup>h</sup>dak-、\*?uma- のような形だったと推定することは、(現時点では)できないことになる。
- 11) これらの例のうち、ʔndzana: (どもり) と ʔndzu (伊集(植物の一種)) には、北琉球祖語において過去に生じた進行同化(progressive assimilation)の影響が及んでいる。この変化は、祖語におい

て \*i の直後であって、しかも \*a, \*e, \*o のいずれかの母音の直前に出現する閉鎖音 (\*t, \*d, \*k, \*g) が口蓋音化するという変化 (首里方言の例: \*ʔika > \*ʔikʲa > ʔitʰa (烏賊)、\*pitʰori > \*pitʰori > \*pitʰori > tʰui 一人) である。(他にもこの変化の影響を受けたと思われる語を首里方言から挙げると、ʔitʰa (板)、ʔitʰubi (苺)、mittʰai (3人)、ʔidzai (左)、tʰidzui (千鳥)、ʔacidza (下駄)、ʔitʰai (光)、ʔidzi (髭) などがある。) ちなみにこの変化は、同じ狭母音であっても \*u の直後では生じない。たとえば ʔuta (歌)、ʔuda (札)、ʔudi (腕)、juttai (4人)、ʔukasaN (深い) などの語中の閉鎖音は、この進行同化の影響をこうむっていない。また tsitu (土産)、sidai (簾)、tsikajuN (使う)、sigata (姿) などの語中の閉鎖音 (\*t, \*d, \*k, \*g) もこの変化の影響を受けていないが、これは、これらの語頭音節の i がもともとは (\*i ではなく) \*u だったからである。(すなわち、「土産、簾、使う、姿」はそれぞれ \*tuto, \*su<sup>d</sup>dari, \*tukajuN, \*su<sup>g</sup>gata と再建される。) このことからこの進行同化と、(本稿の (11) に記述した) 舌頂音から始まる音節の \*u の前進化との相対年代を明らかにすることができる。すなわちこの進行同化は、\*u の前進化よりも前に (歴史的に先に) 起こったことが、ここから分かるのである。

- 12) 首里方言の祖先の体系では有声阻害音が鼻音性を持っていたことは、すでに服部 (1978) によって指摘されている。服部 (1978) は、その有声阻害音の前鼻音 (\*<sup>m</sup>b, \*<sup>m</sup>d, \*<sup>m</sup>g) の痕跡が、現代首里方言の ʔaNda (油)、kaNda (蔓)、ʔiNgu (垢) などの語中の N に残されていることを指摘した。同様な現象は上野 (2017b) の記述した徳之島の浅間方言にも観察されている (浅間方言の例: ʔamba: 油、kandza: 蔓、ʔiŋgo 垢)。
- 13) ここでは、この前鼻音的な特徴が北琉球祖語の時代において存在していたことを前提としているが、このためには首里方言以外の北琉球の諸方言においても、その有声の阻害音が過去に前鼻音的な特徴を持っていたと考えなければ説明できないような事例を、さらに発見する必要がある。これは今後の課題としたい。
- 14) (24) の変化の条件を満たしているように見えるが生じていない場合には、その語頭の音節に非狭母音 (すなわち \*ʔo や \*ʔe など) を再建する可能性を考えなければならない。たとえば Pellard (2013) は、「海」という語を \*omi のように再建しているが、その根拠の一つとして、現代首里方言のこの語の語形が ʔumi (海) であり、この語には本稿の「音節構造変化その1」に相当する変化が生じていない (つまり「海」は \*<sup>m</sup>mi のように変化していない) ことを挙げている。これと同様、その語頭音節の主母音として非狭母音 (すなわち \*ʔo や \*ʔe など) の可能性が考えられる語として、首里方言の ʔumatsi (火)、ʔimi (夢)、ʔudi (腕)、ʔu:bi (帯)、ʔu:du (布団)、ʔibi (海老)、ʔi:bi (指) などが挙げられる。これらは首里方言で、たとえば \*<sup>n</sup>di (腕) や \*<sup>m</sup>bi (海老) などとはなっていないことから考えて、その語頭音節の主音に非狭母音 (\*ʔo あるいは \*ʔe) を再建する可能性が考えられる。つまりそれらの北琉球祖語における再建形には、\*ʔomatu (火)、\*ʔemi (夢)、\*ʔo<sup>n</sup>de (腕)、\*ʔo<sup>m</sup>bi (帯)、\*ʔo<sup>n</sup>do~\*ʔo<sup>n</sup>du (布団)、\*ʔe<sup>m</sup>bi (海老)、\*ʔe<sup>m</sup>bi (指) などのようなものを推定することができる。(ちなみに最後の「指」という語の与論島における出現形は ʔuibi なので、この語の祖形として \*ʔui<sup>m</sup>bi (指) を建てることも可能である。)
- 15) 沖縄本島南部祖語 (Proto-Southern-Okinawan) とは、首里や那覇をはじめとする沖縄本島南部の諸方言の祖体系のことを示す。同じ沖縄本島の北部諸方言との系統的な境界がどこにあるかについては、稿をあらためて論じなければならない。
- 16) (18a) の中で、「音節構造変化その1」の音条件として、語頭から2つめの音節のオンセットが「鼻音性を持つ音」と記述していて、それが「鼻音」と記述していないのは、以上のような理由による。
- 17) この「鰻」という語が、現代の大和浜方言において (ʔunagi ではなく) ʔonagi のような語形で出現しているのは、他の北琉球の諸方言から分岐した後にこの方言に生じた母音同化の結果である。長田・須山・藤井 (編) 1980: 578) にも解説があるように、この方言には、後続の音節の主音が a の場合に、\*u が o へと変化した。そのため「鰻」は、\*ʔunagi > ʔonagi と変化を遂げた。ʔonagi (鰻) のほかにも、同様な変化を経て語頭音節の主母音が \*u から o に変化したと思われる語を挙げれば、ʔosagi (兎)、mora (村)、mok<sup>h</sup>aci (昔)、mok<sup>h</sup>adze (百足)、ʔot<sup>h</sup>a (歌)、nok<sup>h</sup>a (糠)、wonagu (女) などがある。
- 18) 「稲」については、奄美大島で ʔni: のような形で出現していることが分かる。\*ʔine > ʔni: という変化も、他の方言とは独立してこの方言に生じたものであろう。
- 19) 与論島に「馬」と「孫」の語頭音節の狭母音 \*u の脱落変化が及んでいないことは、特に注目に値する。また木部ほか (2011) の記録を見ると、同じような特徴が喜界島方言の一部の集落にも観察さ

れるようだ。たとえば喜界島の志戸桶方言では、「馬」と「孫」はそれぞれ  $\text{?uma}$ 、 $\text{?umaŋa}$  のように記述されている。このことは、この喜界島でも一部の方言に「馬」と「孫」の語頭音節の \*u が保持されていることを示している。

- 20) すなわち (25) ~ (27) の諸方言は、おそらくそれぞれ独立して、これらの語の語頭の主母音を脱落させて今日あるような語形へと変化した、と考えざるを得ない。
- 21) この「蕪」という語は、首里方言で  $\text{?ŋŋdi}$ 、奄美大島大和浜方言では  $\text{?udi}$  (蕪) だが、与論島では  $\text{?udui}$  (蕪) なので、ここには複数の祖形を候補として併記してある。おそらく語末音節に2重母音を持つ  $\text{*?u}^{\text{d}}\text{doi} \sim \text{*?u}^{\text{d}}\text{dui}$  のほうが  $\text{*?u}^{\text{d}}\text{de}$  より、古い祖形なのではないかと思われる。与論島には、他の多くの北琉球の諸語・諸方言に生じた2重母音の融合変化 ( $\text{*oi} > \text{*e}$  あるいは  $\text{*ui} > \text{*i}$ ) が生じていない。たとえば松森 (2021: 注16) で取り上げた「烏賊の墨」も、首里方言では  $\text{kuri}$ 、奄美大島大和浜方言では  $\text{kuri}$ 、あるいは  $\text{?itʰanukuri}$  なのに対して、与論島方言では  $\text{?itʰa guru}$  という語形で出現している。その語形からこの「烏賊の墨」という語には、 $\text{*kuroi}$  または  $\text{*kurui}$  のような祖形が再建できる。
- このように与論島の言語体系には、他の北琉球の諸語・諸方言においてはすでに失われてしまった多くの音声的特徴が、依然として保たれている傾向が見られる (注19で触れた「馬」と「孫」の語頭音節の狭母音 \*u の保持についても、同じことが言える)。そのためこの島の言語体系は、通時的観点から見て特に重要で、今後の詳細な調査と網羅的な語彙記述、音声データの記録・保存が望まれる。
- 22) この「音節構造変化その2」は、接頭辞内部にも、また接頭辞と語根の間にも生じていることが、首里方言のデータから分かる。たとえば、「空からの」を意味する接頭辞の  $\text{*muna-}$  はこの変化の影響を受けて  $\text{*muna-} > \text{ŋna-}$  のように変化を遂げた結果、音節主音の鼻音をその語頭に出現させている (例:  $\text{ŋnaja}$ : 空き家、 $\text{ŋnadi}$ : 素手・手ぶら、 $\text{ŋnakudzi}$  はずれくじ、等)。また首里方言では、接頭辞の  $\text{*mi-}$  (御-) とそれに続く語根との間にもこの変化が生じている (例:  $\text{mpana}$  お花、 $\text{ŋtumi}$  お米、 $\text{ŋtama}$  御釜、 $\text{ŋtabi}$  紙銭、 $\text{ŋti}$  手、 $\text{ŋtan}$  神)。
- 23) これらの語例のうち  $\text{mok}^{\text{h}}\text{aci}$  (昔)、 $\text{mok}^{\text{h}}\text{adzε}$  (百足) の2語については、注17で「鰻  $\text{?onagi}$ 」という語に関連して触れた母音同化が生じ、 $\text{*muk}^{\text{h}}\text{aci} > \text{mok}^{\text{h}}\text{aci}$  (昔)、 $\text{*muk}^{\text{h}}\text{adzε} > \text{mok}^{\text{h}}\text{adzε}$  (百足) のように、語頭音節の \*mu が mo に変化を遂げている。
- 24) 「港」は、大和浜方言では  $\text{t}^{\text{h}}\text{omari}$  であり、この語はあきらかに首里方言の  $\text{ŋnatu}$  (港) と同源語ではないため、ここには載せていない。
- 25) ただし、鼻音以外の共鳴音 (\*r や \*j など) が後続した場合には、この変化は生じていない。たとえば、首里方言の  $\text{mura}$  (村)、 $\text{mija}$  (宮)、 $\text{mijaku}$  (都)、 $\text{mijarabi}$  (娘、おとめ) などの語頭音節の \*u または \*i は脱落を遂げていないことから、これが分かる。
- 26) 後続音節の主母音に制約がある、という記述は、すでに国立国語研究所 (編) (1963: 45-46) に成されている。それは次のようなものである。「[標準語との対応から] 次のモーラに母音 i, u を含まないとき、首里方言では多く N に対応する。」ここから分かるように、国立国語研究所 (編) (1963) では、標準語における同源語との比較による一般化を行っている。本稿の第2節で論じたように、琉球語の比較言語学的考察においては (標準語をはじめとする) 本土の諸方言の体系の例を持ち出して結論づけることは、できる限り避けなければならない。しかしながら国立国語研究所 (編) (1963) が編纂された時点では、他に比較すべき言語データが限られていたために (比較言語学的に考察できるだけのデータがそろった他の琉球諸語の記述研究が存在しなかったために)、標準語を持ち出して比較するほか手立てがなかったと言えるだろう。
- 27) 国立国語研究所 (編) (1963: 45-46) には、語頭の狭母音が脱落を遂げていない例として  $\text{miti}$  (道)、 $\text{mimi}$  (耳)、 $\text{midzi}$  (水)、 $\text{muci}$  (虫)、 $\text{mudzi}$  (麦) が挙げられている。このうち  $\text{midzi}$  (水) については、その日琉祖語の祖形が  $\text{*me}^{\text{d}}\text{du}$  であると想定されているので、ここに挙げる例としてはふさわしくない。(この  $\text{*me}^{\text{d}}\text{du}$  という語に狭母音の脱落が生じていないのは、その語頭音節の主音がもともと狭母音ではない、という理由によるからである。)
- 28) この語がなぜ例外となるかについては、本稿の注11で見た進行同化との関連を考慮しなければならないだろう。これは母音 i の影響が後続の閉鎖音 (k, g, d, t) に及んでそれを口蓋化した ( $\text{*ka} > \text{k}^{\text{j}}\text{a} > \text{tʰa}$ 、 $\text{*to} > \text{t}^{\text{j}}\text{o} > \text{tʰo}$  など) という変化だが、「棘  $\text{*ni}^{\text{d}}\text{ge}$ 」という語には (その語頭音節の主母音が狭母音の \*i だったために) その変化の影響が及び、それによって後続の子音 \*g が口蓋化して  $\text{*ni}^{\text{d}}\text{ge} > \text{*ni}^{\text{d}}\text{gje}$  となったことが想定される。おそらくは、その口蓋化した子音の影響により、現代

- の大和浜方言ではその語末音節は (gi ではなく) gi として出現するのではないと思われる。
- 29) mit<sup>h</sup>unath<sup>e</sup> (一昨年) にも、注11で述べた進行同化の関与が認められる。この語は、\*mitonate > \*mit<sup>h</sup>onate > mit<sup>h</sup>unateのような変化の過程を経て、現代の mit<sup>h</sup>unath<sup>e</sup> という語形に変化したと想定される。
- 30) この「蓑」という語が、\*mino > mjo のように変化を遂げた経緯についての考察は、別稿に譲りたい。ちなみに、同様な変化をこうむったと思われる語に mja: (貝) が挙げられる。この語も、\*mina > mja: のような変化を遂げて、現代の大和浜方言の語形 mja: に変化したと考えられる。
- 31) この変化の条件を満たしているように見えるが、それが生じていない首里方言の例としては、mumu (桃)、mudui (戻り)、mu:ku (婿)、nunu (布) などが挙げられる。これらには (x<sup>h</sup>mmo (桃)、x<sup>h</sup>mku (婿)、x<sup>h</sup>nu (布) などとはなっていないことから見て) その語頭に非狭母音を持つ \*momo (桃)、\*modori (戻り)、\*moko (婿)、\*nono (布) などの祖形を再建しなければならないだろう。
- 32) Pellard (2013 : 86) は、この「麦」という語の祖形に \*mogi を建てているが、その根拠の一つとして首里方言のこの語 (mudzi 麦) には、本稿で示した「音節構造変化その2」に相当する変化が生じていないことを挙げている。しかしながら本稿でこれまで論じてきたことをもとにすれば、首里方言においてこの変化が生じていないのは、\*mugi の第2音節の \*gi がきこえ度の低い狭母音の \*i を主音として持っていたからである。すなわちこの語に本稿の「音節構造変化その2」に相当する変化が生じていないという事実は、首里方言のmudzi (麦) という語の祖形として \*mogi (あるいは \*mo<sup>o</sup>gi) を再建するための有力な根拠とはならない。したがってそのための根拠は、首里方言以外の言語体系に求めなければならないだろう。(ちなみに Pellard (2013) には、\*mogi と再建するための根拠として、宮古・八重山・与那国などのデータも挙げられている。「麦」の祖形が \*mogi (あるいは \*mo<sup>o</sup>gi) だったという根拠は、これら南琉球の諸方言に求めなければならないだろう。)
- 33) 長田・須山・藤井 (編) (1980) には「棟」に当たる語形はなかったので、「建物の棟上げ」の語形をここに載せた。
- 34) 上野 (2017a) には「土」に ŋtca: (上野2017a : 157)、「棘」に ŋgi: (上野2017a : 153) という記述がある。これらの例は、この徳之島の体系においても、その一部の語に首里方言と似たような音節構造の変化が過去に生じたことを示唆している。しかしその一方で上野 (2017a) では、「溝」は mi:dzu (上野2017a : 154)、「味噌」は miçu: (上野2017a : 150)、「一昨年」は mit<sup>h</sup>una:t<sup>i</sup> (上野2017a : 156) と記述されており、これらの語には似たような音節構造の変化が及んでいないことが分かる。この点から見て、この徳之島の方言の「土」や「棘」の音節構造の変化は、首里方言を中心とした沖縄本島南部の諸方言に生じた「音節構造変化その2」とはおそらくは別の (独立して生じた) 変化ではないか、と考えられる。
- 35) 上野 (2017a, b) には「向かい風」の語形はなかったので、「向う」の語形を載せた。
- 36) 菊・高橋 (2005) には「昔」の語はなかったので、「昔の家」の語形を載せた。
- 37) 菊・高橋 (2005) には「向かい風」の語形はなかったので、「向かい」の語形を載せた。
- 38) 「胸」については、菊・高橋 (2005) にある語形とは異なる語形が、同じ与論島の体系を記述した山田 (1995) にあったため、カッコ内に付記した。おそらくこれは、集落による語形の違いではないかと思われる。菊・高橋 (2005) の「はしがき」部分を読むと、著者の一人である菊千代氏の記録したものは与論島のニジャバル (麦屋西区・東区・古里) という集落の語彙であることが分かる。一方、山田 (1995) の記述した方言形が与論島のどの集落で使用されている語彙なのかについては、山田 (1995) の解説部分からは把握できない。(ちなみに平山輝男氏の執筆した山田 (1995) の「序」の部分を読むと、著者である山田実氏は与論島の茶花という集落の出身者であることが分かる。したがってこれらは、茶花方言の語形である可能性がある。)
- 39) 「棟」についても、菊・高橋 (2005) に載せられたものとは異なる語形が山田 (1995) にあったため、カッコ内に載せた。
- 40) したがって本稿では、たとえば首里方言の ?mbusaN (重い)、?ŋŋdi: (燕)、?ŋdzana: (どもり)、ŋdzari (乱れ)、ŋdzasaN (苦い) などの北琉球祖語における祖形を、それぞれ \*?u<sup>m</sup>busaN、\*?u<sup>o</sup>de、\*?i<sup>o</sup>gana、\*mi<sup>o</sup>dare、\*ni<sup>o</sup>gasaN と再建した。

## 参考文献

- Heinrich, Patrick, Shinsho Miyara and Michinori Shimoji (eds.) (2015) *Handbook of the Ryukyuan languages:History, structure, and use*. Berlin: De Gruyter Mouton.
- 服部四郎 (1978) 「日本祖語について・6」『月刊言語』 7-8: 88-96. 服部 (著) 上野補注 (2018) に再録
- 服部四郎 (1979) 「日本祖語について・19」『月刊言語』 8-9: 108-118. 服部 (著) 上野補注 (2018) に再録
- 服部四郎 (2018) 上野善道補注『日本祖語について』 岩波書店
- 林由華・衣畑智秀・木部暢子 (編) (2021) 『フィールドと文献からみる日琉諸語の系統と歴史』 開拓社
- 平山輝男 (編著) (1986) 『奄美方言基礎語彙の研究』 角川書店
- 五十嵐陽介 (2019) [https://researchmap.jp/multidatabases/multidatabase\\_contents/download/238738/86b4e49faf0f27bff29c1cf84fc6bc37/7157?col\\_no=2&frame\\_id=729332](https://researchmap.jp/multidatabases/multidatabase_contents/download/238738/86b4e49faf0f27bff29c1cf84fc6bc37/7157?col_no=2&frame_id=729332)
- 五十嵐陽介 (2021) 「分岐学的手法に基づいた日琉諸語の系統分類の試み」林由華ほか『フィールドと文献からみる日琉諸語の系統と歴史』 開拓社 17-51頁
- 菊千代・高橋俊三 (2005) 『与論方言辞典』 武蔵野書院
- 木部暢子・窪菌晴夫・下地賀代子・ローレンス ウェイン・松森晶子・竹田晃子 (2011) 『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究—喜界島方言調査報告書』 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立国語研究所 (発行)
- 国立国語研究所 (編) (1963) 『国立国語研究所資料集 5 沖縄語辞典』 大蔵省印刷局
- 松森晶子 (1992) 「北琉球の音韻変化—その相対年代と比較言語学的意義—」『ことばのモザイク—奥田夏子名誉教授古稀記念論文集』 目白言語学会 1-34
- 松森晶子 (2021) 「北琉球祖語の祖形再建のこころみ」『日本女子大学紀要 文学部』 第70号: 11-32.
- 長田須磨・須山名保子・藤井美佐子 (編) (1980) 『奄美方言分類辞典 下』 笠間書院
- Pellard, Thomas (2013) Ryukyuan perspectives on the proto-Japonic vowel system. Frellesvig, Bjarke and Peter Sells (eds.) *Japanese / Korean Linguistics* 20, CSLI Publications, 81-96.
- Pellard, Thomas (2015) The linguistic archeology of the Ryukyu Islands. In Heinrich, Patrick, Shinsho Miyara and Michinori Shimoji (eds.) *Handbook of the Ryukyuan languages:History, structure, and use*. 13-37.
- ペラルル, トマ (2016) 「日琉祖語の分岐年代」田窪ほか (編) 『琉球諸語と古代日本語』 くろしお出版 99-124頁
- ローレンス, ウェイン (2020) 琉球語アクセントデータベース (未公開)
- 田窪行則・ジョン ホイットマン・平子達也 (編) (2016) 『琉球諸語と古代日本語』 くろしお出版
- Thorpe, Maner L. (1983) *Ryukyuan language history*. Ph.D. thesis, University of Southern California.
- 上野善道 (2017a) 「徳之島浅間方言のアクセント資料 (3)」『国立国語研究所論集』 12: 139-161.
- 上野善道 (2017b) 「徳之島浅間方言のアクセント資料 (4)」『国立国語研究所論集』 13: 209-242.
- 山田實 (1995) 『与論島辞典』 おうふう